



筆者は保育園の園長や保育関係のライターを経て、保育者を養成する大学の教員をしています。専門は保育と社会福祉。授業では「できるかぎり分かりやすい説明」を心がけていますが、保育原理のような理論的な科目や社会福祉関連科目を教える際には毎回、苦勞がありました。

理論や原論系の科目は学生の生活実感から遠いようです。たとえば社会保障についていくら噛み砕いて説明しても「わからん」というつぶやきが聞こえ、ときに教室は談話室と化していました。

筆者は「うん、難しいよなあ。でもこういうことって、君らが仕事をして家族を支えていく際には、大事なことなんだよ」と、つぶやくばかりでした。

ニュース動画やワイドショー的な話題も取り上げながら説明をすると、そのときだけは静かになります。しかし抽象的な制度の説明に移ると、また学生の集中はとぎれてしまいます。その繰り返しから筆者が編み出した工夫のひとつが「漫画を教材に使う」ということでした。

筆者の授業では、パワーポイントの資料をプロジェクターで投影して講義を行っています。その一部にデジタルデータ化した漫画をさしこみ、登場人物の台詞や感情を追い、「どうしてこう思うんだろうね？」と学生にグループワークなどで考えさせながら、関連する社会福祉制度や概念を説明しています。

筆者が実際に行った例では「社会的養護内容」の科目で、児童養護施設で育つ子どもの内面理解などに漫画を活用しました。その具体的内容を紹介する前に、「漫画を授業に使うことに問題はないのか」という疑問に、ひとまず筆者なりの考えを書いておきます。

まず内容について。多くの漫画は教材として作られてはいないので、現実にはありえないデフォルメされた表現が含まれます。当然、注意が必要です。特に絵の印象は記憶に残りやすいので、内容を精査して使うことが求められます。

下手をすると、学生の記憶に残るのは印象的なワンシーンのみ、ということがあります。現実にも起こりうるエピソードを通して、概念や制度を説明する、あるいは現場ではこういう問題が実際にある、という説明のために使用するという目的がズレてしまうとおかしなことになります。

仮にも「漫画を見させていれば学生が静かになるから」というような理由で、授業内容の大半を漫画に費やすと、「あの先生の授業はずっと漫画を読んでいるらしい」と学校内外からお咎めを受けることになります。

続いて著作権に関する問題です。公益社団法人著作権情報センターに確認したところ、一般に販売されている著作物を教材として授業に使用することは、教育機関の授業プロセスで必要な範囲であれば認められています。その際、道義的には著作権者の許諾が求められますが、法制度上は断りのない使用でも問題はないということです。

「授業で漫画を使う」ということへの疑問は、筆者が知る範囲ではこの二点に大きく集約されると考えます。他にもこんな問題があるが、というご指摘がありましたら、筆者までご連絡をお願いします。

以下、筆者が「社会的養護内容」で使用した漫画を紹介します。

○『いつか見た青い空』りさり著、新書館、2011年

自らも児童養護施設で育った漫画家、りさり。彼女が描く児童養護施設の子どもの姿はみずみずしく、躍動感にあふれています。施設では朝から晩まで同年代の子どもの集団生活をしています。学校（幼稚園）と家庭を行き来する生活ではなく、いつも友達と一緒に、学校生活がずっと続くような日常生活です。

子どもたちが生活する施設は、カトリックの教会が運営しており、シスターが子どもたちの日常生活を援助します。汚い言葉を使うと、口を洗うために石鹸での歯磨きを命じられま

ず（欧米では子どものしつけによくされるおしおきです）。家族で生活していない子どもたちには「きょうだい」の意味が分かりません。「同じ親から生まれたから兄弟・姉妹」ということは、集団生活が日常であると見えてこないのです。ただの「なかよし」とはちがう、特別な「きょうだい」になるにはどうすればいいの？ と考えたさりは、妹分のしおりちゃんと相談して「さりねえちゃん」と呼ばれるようになります。ある日、しおりちゃんに面会に来た母親が、自分の母親ではないことに気づき、さりははじめて「きょうだい」の意味が分かります（「姉妹になりたい」より）。

本書には逆のパターンもあります。あんずちゃんとさくらちゃん姉妹が、母親の関心をめぐって争う「ふたりぼっち」。母親のことをすっかり忘れて仲良くしていた姉妹は小学生になります。突然面会にやってきた母親。姉のあんずちゃんはお母さんを覚えており、すぐにじゃれつきますが、妹のさくらちゃんは小さいときに母親と離れたためにすっかり記憶を失っています。

母親を独り占めしたいあんずちゃんと、普段のようにお姉ちゃんと遊びたいさくらちゃんの感情のすれ違いから、ついにトラブルが起こり、あんずちゃんは「さくらちゃんが邪魔ばかりする」と感じます。姉妹の心に生まれた葛藤。それはお母さんが面会に来なければ起こらなかったのかもしれませんが。

このすれ違いの背後には、年長のあんずちゃんだけに残っている「母親との絆」が描かれています。あんずちゃんは母親が精神を病んでしまったために施設に保護されたことを覚えていますが、さくらちゃんは物心つく前だったために覚えていないのです。ではさくらちゃんの絆はどこに向かったのでしょうか？

愛着の絆とそのつまづきについて考えるきっかけにはとてもよい作品です。同じ著者による続編ともいうべき『君と歌った愛の歌』（新書館、2014）もおすすめです。

※ 本連載へのご意見、ご感想などをお聞かせください。
sako@hgu.ac.jp 迫 共（さこともや）